

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

コメントと討論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2017-12-25 キーワード: 作成者: 松岡, 正子, 長谷, 千代子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008631

コメントと討論

コメンテーター

松岡 正子
愛知大学

長谷千代子
九州大学

松岡 廖先生、高山先生、どうもありがとうございました。お2人ともたくさんの映像資料を提供してくださいましたので、とても分かりやすかったです。

まず廖先生のご報告についてコメントさせていただきます。廖先生のテーマは古村落の保護と開発ですが、古村落とか古村落観光という言葉は、1980年代の末に既に出ています。ところが近年、再びよく取り上げられていますね。私は今年の4月から半年ほど、四川省にいましたけれども、最初に出た学会のテーマが、古村落の保護と開発でした。それから、テレビでも「記住鄉愁」など一連の古村落ものがよく取り上げられているなという感じです。

廖先生のご報告の中にもありましたが、なぜ近年において、これがテーマになるのかという理由については少なくとも三つ挙げられるのではないかと思います。まず一つは、古村落観光というのが、近年の新現代化や新都市化とワンセットになっているということかと思います。近年、現代化や都市化というのが、大都市だけではなくて、地方の中小都市や農村に至るまで、非常に大規模に進んでおります。そうすると、いわゆる農村にある古村落が持っている伝統的な建築群や生活様式というのが、どんどん消えていこうとしています。

そうすると、大体、2000年を過ぎてからですけれども、そうやってようやく古村落の価値や保護というのが、社会的な問題になってきた。そして、そのような文化遺産の窮状というのを、観光開発というか、いわゆる古村落観光によって救って、そして村落の経済発展に結び付けようとしているのが、この古村落の保護と開発というものではないかと思います。

それから二つ目ですが、現代化や都市化が進めば進むほど、実は都市部の住民にとって、農村の生活や文化というのが一つの癒しとなって、農村観光がブームとなって定着しているということがあると思います。

それから三つ目ですが、中国に行くたびに感じますが、中国は全国的に、高速道路をはじめとして、非常に交通網が良くなっている、実際、奥地の農村にまで舗装道路がい

きわたってきています。そして、マイカーブームを背景として、マイカーによる個人観光客が急増しています。そうすると、いずれほとんどの農村において、この農村観光という観光開発の可能性が出てきているということを感じます。

廖先生の本日のご報告は、このような背景をもとに水源頭村における古村落観光の現状、保護と開発、課題について考察されています。まず村の概況と歴史文化的価値を述べ、次に古村落観光としての保護、開発観光のプロセスと問題点を分析した後で、提言がなされている、とても分かりやすい説明であったと思います。

その中で、直面する問題として挙げられているものとして、少なくとも二つあったと思います。一つは古民家の補修が急務であるが、お金が足りない。もう一つは古民家観光の開発と経営を誰がどのように担うか、村民はどのように参画するのか、という問題です。

この後者のほうですが、興味深いのは、実は当地では2007年までは村のエリートたちが発言して、村民委員会を中心に、村民が主体となっていって、政府と企業は介入しないという形、先生の論文にもありますが、内政性開発であったんですね。ところが2008年以降に、県政府の指導の下で、旅行会社や開発会社と提携して外部の資金や管理のノウハウの導入を図るという外部介入性開発に変わっています。一方で、村民の参加が不十分であると指摘されています。この辺の転換点の説明をもう少しだけいただけたらと思います。

廖先生は、最後に、開発と経営に関しては、後者のほうの外部介入性開発モデル、即ち政府、村民、企業の三位一体の開発モデルと、業者と住民による株式経営モデルを提案されています。やっぱりそうきたか、という予想される結論でしたが、私は今回のご報告に対して、二つ質問をさせていただきたいと思います。

一つは、この開発と経営についてですが、政府、村民、企業による三位一体の開発モデルに対する疑問です。雲南省の麗江やそれから四川もそうなのですが、経営の中に外部者が入ってくると、実は、観光客の視線にたった非常に効率的で収益性の高い観光開発が進められていますけれども、そこはやがて観光の場所になってしまって、村民の生活の場ではなくなる。そして、村民がそこから離れていくという現象が、いろんな所で起きています。そうすると、観光客に提供された村落文化の質そのものが変わってきているという状況があります。そこでは、大きな開発が狙われていると思うのですが、小さな開発では駄目なのか。そもそも保護と観光開発というのは、本当にワンセットなのかということについて、お聞きしたいと思います。

それから、もう一つの質問ですが、この水源頭村の状況について、120戸、400人のうち、ほとんどの若者は出稼ぎや勉強で村をでており、残っているのは老人と子どもだけという、全国的な農村の空洞化現象がみられ、それがどんどん進んで極めて深刻になっております。そうしますと、ここで観光開発をする場合、次世代のものは高学歴ですか

ら、たとえ観光開発でいろんな職種が作り出されたとしても、それはサービス業ですから、彼らはほとんど戻ってきませんね。そうすると、一体、この村の観光は、誰が担うのか、誰のための古村落の保護なのでしょう、ご意見をいただければと思います。

それから、次の高山先生のご発表についてですが、私にとってはコメントが難しかったです。高山先生はこのテーマに関して、2008年から少なくとも四つの論文を出されており、私も全部、読ませていただきましたが、烈士陵园、社会主義リアリズム、戦跡観光、聖地の記憶という一連のテーマは、10年近くの時間をかけて積みあげられてきたテーマだということをも、理解いたしました。

理解が難しかったのは、中国の南部と北部の烈士陵园の記念碑の比較を通して、烈士陵园の景観がどのように資源化されていったかを考察するというなかで、烈士陵园の記念碑に関する北と南の違いと烈士陵园の景観の儀礼化というのがどのように結び付くのかという点です。

それから、この条例に関するものが、国民党の場合は、1931年に褒揚条例、36年に忠烈祠弁法が出されていますが、共産党の場合は、褒揚条例が2011年、烈祠更生弁法2014年とかなり遅いようですが、この辺はどのように解釈したらいいのでしょうか。

河合 ありがとうございます。では、次に、長谷先生にコメントをお願いいたします。

長谷 長谷です。廖先生と高山先生、どうもご発表ありがとうございました。いろいろお聞きしたいことはあるのですが、本シンポジウムの趣旨は歴史の資源化であり、特に本セッションは歴史と景観がテーマなので、その主題に絞ってコメントをします。

私は歴史を専門的に研究しているわけではないので、私なりに何冊か事前に歴史関係の本を読んでみて、そもそも歴史とは何なのかとちょっと考えてみました。その結果、主にアライダ・アスマンの『記憶のなかの歴史』を参考にして私なりに理解したところでは、四つの特徴があるように思います。

まず一つ目は、歴史というのは出来事の連続で、その出来事同士の間には、文脈という、関連性が想定されることです。単独の出来事だけでは、歴史として語りにくいだろうということが一つです。二つ目に、それと関連するのですが、物語性というのがあります。語る以上はやはり語り手の評価や価値観が入り込むということが起こると思われれます。

そして三つ目に、語れる程度には客観視できるような事実に基づいていることです。遠い過去というか、現在との距離感があれば、客観的に対処できるようになると思われれます。特にある出来事が歴史になるとか、博物館行きになるというのは、その出来事が現代社会にとって、ある程度、過去のことになり、用済みになっているということだと思えます。

そして、四つ目として、ある種の距離感が取れるからこそ、ある程度、多様に異なる価値観によって、いろんな表現方法で取り扱うことができるようになることです。歴史の教科書に載るであるとか、テレビドラマ化される、小説化される、博物館で展示される、文物観光に利用される。そういうことが、やりやすくなるということです。

そのように考えてみると、本セッションのキーワードである景観というのは、この四つ目の特徴に特に関連しています。つまり歴史がどう表現されるかということです。すると、そこで私が気になるのは、景観という表現方法がうまくなじまない歴史というものがあるのではないかとということです。ここではその観点から、コメントと質問をしたいと思います。

まず、廖先生のご発表の中では、住民と行政と企業が共同で観光地を運営していくことが一つの解決策として示されましたが、もう一つ観光客、つまり見る側の価値観というのを考える必要があるのではないかと思いました。

その面で言うと、ここでは古村落という言葉の方でしたけれども、古村落にしる、古建築にしる、そのジャンルの内部でももう少し細かい意味付けができるのではないかと思います。明・清時代の古建築といっても、明の時代のと清の時代のとは、建築様式に違いがあるのではないのでしょうか。

なぜそこが気になるかというと、この村の周辺にも、どうもたくさん、同じような古い村があって、やはり美しい景観と古建築がセールスポイントになっているらしいのです。もし他の村にもっと古い宋代とか元代の建築があるとか、あるいは清の時代の非常にきれいな建築が残っていると、水源頭村の建築物が色あせて見えてしまうということが起こりかねません。

あるいはたとえば、他の村に明の初期の建築物がたくさん残っていて、清のものがなければ、逆に水源頭村では、明代の建築物より清代の建築物のほうが、観光資源としての価値を持つかもしれません。また、歴史が少々浅くても見た目が美しい建築物がアクセスしやすいところがあれば、古い建築物よりもそちらのほうが価値を持つかもしれない。

このように、ものの価値とは相対的なものだと思います。このシンポジウムでは歴史に焦点を当てているから「古さ」が、どうしても最大の価値のように見えてしまいますが、景観や観光という文脈が入ってくると、他の評価軸が入ってくることになります。そして古建築が観光客や周囲の村々にとって持つ価値というのが、ものすごく変わってしまうことというのがあり得るのではないかと思います。

なので、競合する周囲の他の古村落観光との関係の中で、水源頭村の建物の価値がどうなっているのかを知りたいと思います。

もう一つは、それに少し関係する話なのですが、時代的にどこまでが歴史的価値を持つんだらうかという問題があります。例えば、そこに中華民国期の建築があったとして、

その価値はどれくらい評価されるのでしょうか。明・清期の建築に比べて新しいから価値がないということになるのでしょうか。しかし最近では、近代文化遺産というようなものも、新たに価値を認められつつあるとすれば、新しいから価値がないとは限らない気がします。

それから、ネット上で少し水源頭村や、その周辺の村を回った旅行者の感想を見てみると、落書きについての言及がありまして、これが面白かったです。古い建物に、「地主と戦おう」とか、「貧農・中農は団結しよう」等の、文革やそれ以前の政治スローガンが書き残されたままになっているのですが、それが時代を感じさせるというように、わりと好意的な感想が書かれていたんですね。

ある見方からすると、それは古建築を汚す落書きのようにも見えるのですが、それがあるがゆえに、一層歴史が引き立つというか、物語性を持つというか、そういう側面もあると思うんですね。そういった場合に、中国の今の感覚では、そういう落書きに、歴史的価値を認めて残すのか、それとも消したほうがいいとなるのか、その辺の感覚というのをちょっとお聞きしたいなと思います。

次に、高山先生のご発表についてです。烈士というのが一つのテーマだったと思うのですが、さっき私が挙げた歴史の特徴から見ると、烈士そのものはまだ十分に歴史化しにくいテーマなのではないかと思いました。烈士は殉職者も含めて考えれば、現在も増え続けているわけですし、現代中国にとって、決して用済みになったというようなものではないと思います。

そうすると、私としては、烈士という問題は、歴史よりも、ロバート・ベラーの言う市民宗教という枠組みを使ったほうが分かりやすい感じがしました。市民宗教というのは、伝統宗教そのものではないけれども、ある社会や国家が人々を統合するために必要とする宗教のような儀礼と教義の体系というふうに言っていていいかと思います。中国の場合は、中国的な共産主義が市民宗教の教義で、烈士は殉教者で、烈士墓は聖地であるという比喩が成り立つでしょう。

そう考えると、高山先生が報告されたのは、烈士が市民宗教の一要素として、市民宗教を形成していく過程であって、それにふさわしい表現形式の模索と変遷の歴史であると思われる。その中で用済みになる古い表現形式もあるという、そういう話として聞きました。

そのように私は認識したという前提で質問ですけれども、公園墓地という在り方がどんなふうに成立したのかというところが、まず気になりました。日本では多磨霊園が公園墓地のはしりで、国家的要人、特に東郷平八郎の墓ができたことがきっかけのなんですけれども、当初、墓地を公園とすることには、かなり多くの人が抵抗を感じていたそうです。つまり墓地はやはり厳粛な雰囲気であるべきだと考える人々がいたのです。一方、公園というのは、人がたくさん来てにぎやかで、ジョギングする人もいます。そ

うすると、雰囲気や場所としての感じがミスマッチになってしまいます。中国の場合は、その辺はどうだったのだろうかというのが、まず一つ、気になることです。

そこから考えると、お墓と記念碑というのは、分けていいものでもあると思うんですね。例えば、お墓のまわりは厳粛な雰囲気でなければならないという感覚がもしあるとすれば、墓とは別に記念碑だけを公園や広場に建てて、そこで烈士を記念するようにしても良かったのではないのでしょうか。その意味では、お墓と記念碑が一緒になる必然性は、どこまであるのかなという気がするのです。

なので、今紹介された中で、お墓と記念碑の距離感がどうなっているのかをお尋ねしたいと思います。記念碑だけであれば、周りの景観ももっと公園っぽくしやすいでしょうし、その距離感で、景観の雰囲気も変わってくるのではないかと思いますので、その辺りをよろしくお願いします。

それからもう一つ言えば、景観のつくり方について、共産主義の発想では、多分、ほんの何十年か前までは、「人定勝天」と言っていたと思うんです。人の力が自然に打ち勝って、それを征服して、国土にしろ、社会にしろ、人為的な力で変えていけるという発想が前面に出ていたと思うのです。今日の写真を見ても、多くの烈士陵园が自然を生かすというよりも、人工的な広場を造る類のものが多いような印象を受けました。

それで言うと、近年、自然環境主義が台頭したり、中華文明の伝統を見直そうという機運が高まっている中で、建築様式になにか変化が起こっているのかどうか、社会主義リアリズムという形式は、もう用済みになったのかどうかというのが気になることです。写真によっては、伝統的な中国の死者を祭るための位牌等を模したものと、公園と一体になっているようなものも出てきていたので、それらが時代的にどう変遷してきたのかも、ちょっとお伺いしたいと思います。以上です。

討 論

河合 長谷先生、ありがとうございました。先に高山先生のほうから回答いただいてもよろしいでしょうか。よろしくお願いします。

高山 コメントありがとうございました。1点目の松岡先生からのご指摘ですけれども、南部と北部の比較といったときに、今回、途中で国民党と共産党の烈士の顕彰の違いというのを勝手に置き換えてしまって、そのほうが分かりやすいかなと思いましたので、途中から置き換えて考えました。

次に中国共産党による烈士の顕彰の方法ですけれども、これは1949年から既に烈士に関する遺品とかを集めるように条例が出されて、それを集めて博物館化するようにとも言われてます。それから、各地方、政府に烈士の墓を造るようにという条例も出してい

ます。それから、以下の人たちを烈士とするという条例を1949年に出していて、その烈士の家族については、これこれこういう優遇措置を与えるという文言を出しています。例えば、学費を免除するとか、さまざまな烈士への優遇措置が取られていて、それは現在までも続いています。年に幾らかっていう補助金があって、それは年々増えていってまస్తుてのが、清明節辺りが近づいてくると、そんな記事がちょこっと載ったりします。

国民党の烈士顕彰に大きな影響を与えているのは、きょうのテーマでもある英雄と、伝統的な英雄の崇拜とも関わっていて、国民党の英雄崇拜、国民党の烈士顕彰のときには、岳飛の、岳飛廟とか、岳飛のイメージを非常に意識していて、それを研究した上で、烈士の顕彰方法を出しています。そういった国民党の烈士顕彰っていうのは伝統的な英雄のイメージが、英雄顕彰の様式が非常にまだ強く残っていて、北部に見られるような、ソ連の影響を受けた烈士陵園なんかは、やっぱり西洋的なものであるといえます。

延安のものなのですが、延安に造られたときには、まだ共産党は政権を握ってませんので、その中間的なもので、やはり両方の形が見られます。シンプルな形で、社会主義リアリズムの萌芽ともいえるようなものと、やはり伝統的な烈士、英雄顕彰の方法が見られるかなと思います。

それと関連してなんですが、長谷先生のご質問にお答えしますと、中国の公共墓地が登場する過程というのは、近代化の過程とほぼイコールであって、公共の場所が造られることと、公共墓地が造られていくこと、公共の空間がつくられていくことがイコールであったので、公共墓地を持つことと公園を持つことというのは、ほぼ同時期に上海等で起こっています。

公園、公共のきれいな芝生が生えているような場所が欲しいというのは、やはり上海の人たちにとっての強い願望であって、そこが墓であったとしても、墓はきれいであるべきかと。確か、申報か何かの投稿にもあったんですけども、あまりおどろおどろしい古めかしい墓は嫌だっていうような記事があったかと思います。

それは日本も同じで、やはり多磨霊園を造る前に、青山墓地なんかは明治5年にもととの墓、お寺にあった墓地から公共墓地に変わってるんですけども、5カ所変わってるんですけども、そのときもやっぱり、おどろおどろしい昔の雰囲気は嫌で、西洋風の明るい散歩ができるような墓が欲しいんだという願望があったそうです。やはり日本とも中国も似たようなもので、中国は日本にある公園墓地とか、公園の形も参考にしていて、明るいものもいいんだ。古めかしいものは嫌なんだということを述べています。

長谷先生の最初にあった烈士を祭る方法が市民宗教に近いという指摘なんですけれども、まさにそのとおりで、烈士をどういうふうにするかって、1950年代に中国共産党も考えて、伝統的な祖先祭祀にあえて合わせる形で、国のために死んだ人と祖先を同列に考えることで、清明節なんかで、人々が烈士に対して親しみをもちやすいようにしたんだと言っています。

だからあえて清明節に烈士の墓参りをするよというのは、50年代に言っていて、やはりその頃の記事を見ると、烈士陵園で墓参りをしました。で、その記事はいったん廃れるんですけども、やはり21世紀に入って、烈士の再評価が始まる中で、烈士の墓参りしてますっていう写真が大きく載って、特に小学生が烈士の墓参りして、小学生・中学生が烈士の墓を、墓参りしてます。若い人が、だって烈士を尊敬してますっていう記事が、よく載るようになっていきます。

次、最後の質問ですけども、伝統的なものと社会主義的なもの、人工的なものと自然的なものは、どういうふうになら変わってきているのかっていう点ですけども、社会主義リアリズムはもう廃れたと言ってもいいのかもしれませんが、公式の芸術としては廃れた代わりに、それもまた別の現代アートの題材として再評価される傾向があって、かつて毛沢東の姿とか、かつてたくさん作られたプロパガンダポスターを、あえてコラージュして現代アートにするという手法が用いられています。

そのアンディ・ウォーホルなんか、時々、参考になっているんですけども、そういう意味では、社会主義リアリズムは、まだまだ続いているといえるかもしれません。伝統的なものと、社会主義的なものがどういうふうになら融合していくのかっていうのは、まだまだこれから研究しなきゃいけない点もあって、意外なところで、伝統的であるとか。

台湾の忠烈祠って、この前、初めて見て、ああ、こんなだったんだって驚いたんですけども、そこで初めて国民党時代の烈士顕彰についての情報を自分が全然持ってなかったっていうことに気付いて、慌てて調べてみたら山のように出てきて、今後も少し検討していきたいなと考えています。以上です。

河合 ありがとうございます。既にちょっと時間を超過しておりますので、廖先生のほうからごく簡単にお答えをお願いします。

廖 松岡先生と長谷先生、ありがとうございます。松岡先生の出された二つの問題ですが、まず2008年以前には、村民が自分たちで開発していたのが、どうして2008年以降に政府が参加したのかという問題です。私の個人的な見方ですが、中国の市場経済の発展はまだ充分なものではありません。政府は経済が発展するなかで依然として非常に大きい作用を果たしています。開発が始まって現在に至るまで、この村の観光開発はまだ初期の段階にあります。初期開発の時期においては、資源の古民家は村民全体のもので、個人のものではありません。それゆえ、政府の力に頼って諸問題を容易に解決しています。2008年以前は村の一部の人が利益を得ていました。しかし、2008年以降は、村民全体のために利益が分配されており、政府がその際に調整をしています。

次に政府、村民、企業の三位一体モデルということと言えますと、成功した例が多くあります。例えば、桂林の隣の龍勝各族自治县の壮族の有名な観光村、平安村は、この

モデルで開発し大成功を収めました。今、毎年、観光客が大体20-30万人、多いときには50万人以上も来ます。その若者の大部分は帰郷しています。民宿経営や工芸品の販売などいろいろな役割を担っています。彼らは出稼ぎには行きません。また、周辺地域の若者や、中には遠方、例えば湖南省、四川省、黒竜江省からも女性がこの村に嫁いで来ています。こうした状況は増えています。

さらに次の問題ですが、この村の観光業はもっか老人が担っています。彼らは主に民宿、ガイド、飲食業、土産の販売などを行っています。古村落の保護は全村のすべての人のために進められていますが、観光業が水源頭村にもたらす経済的効果はまだ高くなく、それゆえ観光業に従事する人はそれほど多くはありません。

次は長谷先生の出された問題ですね。実際には、この村の古民家は明代・清代・民国期のものですが、それらのうち最も多く重要なのが清代の建築です。明代の民家も一部あって、それも重要です。観光客は周囲の村と比べて「古さ」を基準にします。周囲の村との競争もあって、観光客の誘致や工芸品の販売、宣伝、建設などの面で競争が見られます。また、この村の周囲の村のほかに鍾乳洞もあります。さらに、大体13kmくらい離れた所に、台湾人が開発した遊樂園という観光地もあります。

「打倒地主」といった標語には一定の歴史的価値がありますが、残っているところと消失したところとがあります。消失した場合は、自然に風化して消失した場合と老朽化したため壊された場合とがあります。

河合 廖先生、ありがとうございます。それでは、少し時間を超えてしまいましたけれども、これで終わりたいと思います。このセッションは、ものと景観ということですが、どのように、ものから歴史の資源化を見ていくかということで、非常に有意義な議論がなされたと思います。現在、もう時間を10分くらい超えておりますので、質疑応答の時間は、総合討論のほうに回したいと思います。それでは、このセッションを終わりたいと思います。発表いただいた廖先生、それから高山先生、ありがとうございました。